

住井すゑとその文学の里(五十一)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

雑誌『農民文学』への寄稿

―犬田卯・住井すゑ夫妻―

昭和25年(1950年)の秋、山梨県甲府市の山田多賀市から『農民文学』という名の農民文学雑誌を創刊したいので、ご協力いただきたいという便りが、犬田の許に届いた。

山田は戦前、昭和13年(1938年)公布の国家総動員法による統制下でも、徹底したリアリズム手法で、マルクス主義と国策の農民文学の二大潮流にのみ込まれることなく、農村の現実を活写してきた。

翌26年(1951年)春、その山田が甲府から牛久村大字城中の犬田・住井夫妻を訪ねて来て、創刊予定の『農民文学』に犬田・住井夫妻の寄稿を依頼して帰っていった。

同年9月1日、月刊雑誌『農民文学』が創刊になった。

犬田は、『農民文学』の創刊号から第七号までの各号に、小川芋銭に伝授された老荘思想(※)を基にして、中国古代の周(紀元前1122年ごろ)249年の間の王朝より清崩壊に至るまでの農民思想および理想的な農村の社会について論じた。

住井は、創刊号に『カラカランダ』



第二号に『生きてた男(カラカランダ続)』、第三号に『匙(カラカランダ続々)』という連載小説を寄稿した。その小説は、敗戦(昭和20年・1945年8月15日)間もない農村において、出征(軍隊の一員として戦地に行くこと)していった農家の若い跡取り(後継者)の帰還が遅れ、一方で進む農地解放の混乱の中で、たくましい女性の生き方というストーリーであった。

犬田の病状が平本医師の治療で快方へ―作家武田泰淳へ 朝日新聞紙上での反論―

そのころから犬田の病状が一段と悪化して眠れぬ夜が続くようになった。

住井は、土浦から牛久村に往診に来ている名医の評判高い新治協同病院(現土浦協同病院)の平本医師に相談してみた。平本医師は、学生運動の盛んな水戸高校で社会主義の洗礼を受け、千葉大学医学部に学び、若くして医学博士になった俊才であったが、地方医師としてその生涯を地域医療に捧げていた。平本は貧乏人からは診察料を取らない上に、無料で投薬さえしていくのでも評判であった。

戦前から農民文学運動に通じていた平本は、犬田卯を知っており、気軽に診断してくれた。平本は、『長い間のぜんそくで、アドレナリンやフェドリンなどを常用したために、神経や血管の末しようが攣縮してしまい、頭脳を混濁させるのでしよう』という見立てで、後頭部を氷で冷やし、ブドウ糖液とミノファゲンの注射をしばらく続けなさい、と指示を出して帰っていった。

平本の治療で小康状態を得た犬田は、昭和28年(1953年)7月13日の朝日新聞に『農民小説は何故つまらないか』という短い評論を書いた。この評論は同月5日の、同紙学芸欄に掲載された武田泰淳の『日本を知らない日本人』に異議を唱えたものである。

武田は、『農村小説のつまらないのは、手法その他、自然主義時代から一歩も前進出来ないで、展望のひろい農業小説まで発展できないためである』と一方的に決め付けていた。

それに対し、犬田は、農民小説が発展しないのは、編集者や読者の誤解で、おそらく総合雑誌、文芸雑誌に農民小説が採用されないことにある。たまたま採用されても、それは半都会的か都会的立場の作家が、農村を外部分から旅行者として珍しい行事や古臭い習慣を描き出したものにならざる。本当に農村に生き、農民それ自身の立場に立って現代社会を取り扱い、そこから『新しい文学』を打ち出そうとするような意図を持った

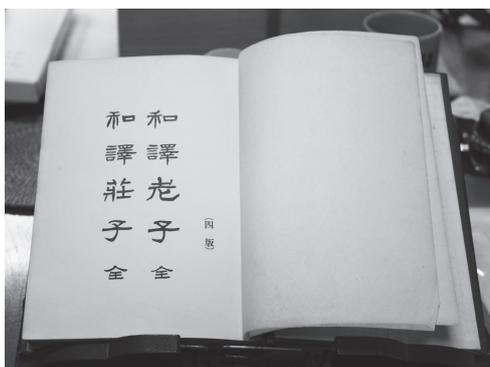
作品は、わが国のジャーナリズムからは、見向きもされない。これでは、日本の農民文学は発展のしようがないではないか、と反論した。

平本は、犬田家に往診に通う間に、牛久沼のほとりが気に入って、引退後は犬田家の隣に居を構え、平本くらの号を用いて俳句さんまの晩年を送った。

平本から住井は次の一句を贈られている。

金輪際いっぽんきりの曼珠沙華

※老荘思想：老は道教の祖老子(紀元前4世紀ごろの人)。荘は荘子(紀元前369年〜286年在世)。荘子は老子の思想を継承して道教を確立、これを老荘思想という。老荘思想は無為自然の道を説いて、理想社会は少数の国民を持つ最小の国家であると説いている。



↑老荘辞典―住井すゑがいつも手元に置いていた。